

細腕なんて言わせない!!

265



「地元が大変なので、少しでもお手伝いできればと思って始めたんですよ。これからは頑張らなくちゃ」と、笑顔を交え語る白土さん

「地元のために頑張るわよ」

「やりたいことをやるの」と話す

白土 和江さん

■ 浜カフェ経営
■ いわき市久之浜町久之浜字北町三九

電話／〇九〇―三七七五七―〇七七三

あの東日本大震災で、じんだな被害を受けたいわきの海岸ライン。命を、そして長年住み慣れた家屋を失った人々。そんな中で、自らを省みず、ボランティアに、あるいは地域の再起・復興のために努めている人も少なくない。

「防波堤のすぐ後ろにあった生まれた家は津波でなくなっちゃったのよ。この津波の後、一帯が火事になってたちまち何十軒という家が、一瞬にして消えてしまっ……」

自宅のあったそばで飲食店「浜カフェ」を営む、白土和江さん（五九）は、屋根にはタキロンを張り、スーパーハウスを設置した店舗を披露しつつ、開業の訳をとつとつと語る。

白土さんは、この店を開く以前は、平の田町でスナック店を開き、二十五年にわたり、ママさんとして務めていた。ところが、あの「天変地異」で地元の一円が壊滅的な被害を受けたことで、一念発起に踏み切った。

「あの日は、午後二時過ぎに梅月のかしわ餅（もち）を買うため、実家にい

て、二時十分に店に行っただけです。そのあと、平の家に帰り、知人の所へかしわ餅を届けたところ、突然のあの大地震でした」

その日を語った白土さんは、震災後はすぐに久之浜へ行き、一面ガレキと化した近辺の片付けのボランティアに励む。また、地元の旅館、高木屋の被害を免れた建物の一角を借り受け、近隣の人たちと炊き出しにも努め、汗を流してきた。

自分にできることを

だが、「地元の復興はまだまだ遠い」と考えた彼女は、「自分にできることをしたい。食べ物を提供するところがなくなってしまったので、それなら飲食で協力を」と考え、ちょうど二年前の十一月末から、実家のあったすぐ近くの「知人

の敷地を借りて」、この店のオープンにこぎつけた。

「店は、地元への奉仕と思っているのよ。もちろん、もうけなんてないわよ」と笑いながら続ける白土さんの店のメニューは、かつ井やハンバーグといった「ランチ系」がメインだったが、「ラーメンやうどん・そば類の要望もあって、いろいろになっちゃった。でも、野菜類の料理は多いのよ。」

店は不定休で、朝は九時前から、夕方は八時までの開業。マイカーのワゴン車を操り出し、食材の買い付けに回る。客層は、もちろん地区の顔見知りが多いも



の、原発の除染作業員や、工事関連の従業員らの姿も目立っている。

ただ、店は簡便な造りのため、「夏は日当たりが良すぎ、冬は寒いよねえー」。少しずつ復興に歩む

久之浜地区には、来春オープンを目指す商業施設「浜風きらら」の計画がある。白土さんは、「私はそこに入ることはないですけど、地域のために頑張る梅月や、高木屋さんらのお手伝いはするつもりですよ。この先もね。少しでも役に立ちたいですから」と、真顔で語る。

さらに、「一人でも二人でもこの街に足を向けてほしい」と、郷土への思いを強く語った後、「私、自由に生きてきたので、苦労はナシです。これからもやりたいことをやっていきます」と話し、表情を一層柔らかくした。



「メニューはランチだけでよかった」

一人でも二人でもこの地に足向けて

プロフィール

しらど・かずえ

1956年11月24日生まれ。久之浜出身。平・田町でのママさん業の影響もあって人脈は広く、年に数回「浜力フェコンベ」を開いて多くの知人らと交流を続ける。本人のハンドは「36」とか。長男夫婦と同居しているが、母親との温泉旅行も欠かさないという。「私の人生、あるがままなのよ」と言って笑う。得意な料理は「何でも」らしい。O型

■お知らせ=このコーナーでは、自ら選んだ仕事に、あるいはその人生においてひた向きに励み、努めている女性を紹介しています。情報をお寄せください。

本荘正彦 版画展

～彩りの木版画～

会期/平成27年10月29日(木)～11月9日(月)
午前10時～午後6時(最終日は午後5時閉場)



有限会社 小野美術

いわき市平字中町22番地の2 Kビル1F

☎0246-35-0383

HP: <http://onobijutsu.jp> e-mail: info@onobijutsu.jp

